

東南アジア大陸諸民族と茶の文化
— 檳榔との比較民俗学的研究 —

松下 智*

目 次

はじめに

一. 苗・瑶語族の茶

(1) 中国の瑶族と茶

広東省の瑶族

広西壮族自治区の茶

雲南省の瑶族と茶

(2) 東南アジアの瑶族

ベトナムの瑶族と茶

ラオスの瑶族と茶

タイの瑶族と茶

苗族の茶と酒

二. タイ語系諸族の茶と檳榔

(1) 中国の傣族と茶

広西壮族自治区壮族の茶

雲南の傣族の茶と檳榔

(2) 東南アジアのタイ族

ベトナムのタイ族

ラオスのタイ族

ミャンマーのタイ族

三. チベット・バーマ語系諸族の茶と檳榔

(1) 雲南のチベット・バーマ諸族の茶

雲南の竹筒茶

雲南の景頗族

四. モン・クメール語系諸族の茶と檳榔

(1) 雲南の茶と檳榔

布朗族の酸茶と檳榔

徳昂族と佯族の茶と檳榔

※(社)豊茗会理事長

(2) ミャンマーのモン・クメール諸族

ミャンマーのパラウン族の茶

(3) ベトナムの京族の茶と檳榔

おわりに

引用文献・参考文献

はじめに

喫茶の始源については、茶の文化解明にとって絶対に見遇すことが出来ない問題である。従来、茶の文化としての喫茶の起源は、中国南部雲南省をはじめ、東南アジア大陸部に見られる「噛み茶」、あるいは、「食べる茶」の存在から、喫茶以前の習俗として、その存在が認められ、それが茶樹の原産地と同地域に存在することから、喫茶の源流を雲南南部方面に求める報告が多い。

本紙第九号に於て、東南アジアから西南アジア、太平洋地域に伝統的に継承されている、檳榔を噛む習俗が、喫茶の習俗と接触し、檳榔から茶に代ったものが、噛み茶であり、食用茶ではないか、と云うことを報告した。

以来、一九九四年二月、雲南省西双版纳傣族自治州勐海県布朗山、一九九五年二月同省徳宏傣族景頗族自治州三台山、同年十月インドアッサム州東部、それに、一九九四年十二月と一九九五年十一月ベトナム北部山地を訪問し、茶と檳榔のかかわりについて、各地諸民族の実態を実見することが出来た。

東南アジア大陸部の山地は、東西南北からの移住民族と土着の民族等々複雑に入り組んでおり、各民族の文化相互の受容と変容が換返されて来ており、短時間の調査では、適確な判断はしかねるが、各地民族の日常生活、時には、宿泊しながらその実態を把握することが出来た。

ここに、主として苗・瑶語族、傣語族系諸民族、チベット・バーマ語系諸民族、さらに、モンクメール語族系諸民族等に於ける、茶と檳榔の扱いについて、その実態を報告し、茶に於ける喫茶習俗の成り立ちについて、檳榔の習俗とのかかわりの一部を明らかにしたい。

一. 苗・瑶語族の茶

(1) 中国の瑶族と茶

瑶族は、かつては長江中流域の沿岸地域に住んでいたといわれるが、歴史上に明記される様になったのは、主として湖南省西部から、湖北省西部にわたる巴蜀の地であり、とりわけ武陵山地域が、その根源の地といわれている^①。

したがって、武陵蛮、長沙蛮、五凌蛮等々種々の呼称をもつ民族で、これら諸蛮が、唐代、宋代、元代、明代さらに清代と南方に移動を始め、広東省北部の南嶺山地にて、東西に分かれ、西方では従来の瑶族として、東方では畬族と呼ばれる様になり、現在に至っている。

湖南省西部の武陵山地域は、古来名茶の産地として知られており、唐代の陸羽（七二九年～八〇三年）による『茶経』にもその記載は明らかである。とりわけ、安化県は、清代初期頃までは、

中国でも屈指の茶産地であり^②、この安化は、梅山蛮といわれた瑶族によって維持されて来た所である。

武陵山を起点として南下した瑶族は、現在でも、湖南省南部の略々全域に分布しており、少数ながら武陵山地域の保靖県、展溪県にも定住しており、展溪県東南部の羅子山には、古来からの伝統文化を継承する、瑶族が定住している。

さらに、湖南省最南端の江華瑶族自治县には、特産の苦茶を産業の中心にしており、各地の瑶族には、茶が経済作物として中心的に生産する所もあるが、経済作物とならなくとも、自家用の茶としては必需品となっている。

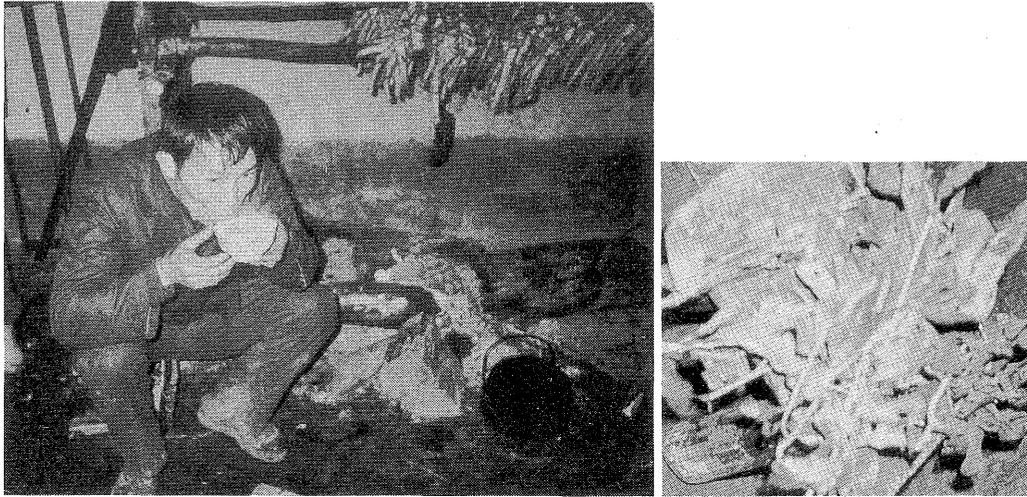
広東省の瑶族

湖南省を南下して来た瑶族は、広東省北部で東西に分かれるが、広東省には、唐代をはじめ宋代、明代、さらに清代にわたって、略々全域にわたって瑶族が分布しており^③、それぞれの地に茶の栽培が認められている。現在では、連南瑶族自治县の黄連茶、樂昌県の白毛茶、東端の潮州市北部、鳳凰山（標高1,200~1,400M）の畬族による烏龍茶が、その名声を保っているが、清代初め頃までは、広州市北部の清遠茶が清遠県の筆架山に住む瑶族の造る茶として、広く知られていた。



第1図 広東省に於ける瑶族の遷移 (筆者メモ図)

さらに、広東省の紅茶として、中国を代表する紅茶となっているが、これも、英徳県周辺山地に住んでいた瑶族によって、古くから造られていた茶から進歩したもので、それが近代製法の紅茶として、漢族に引継がれているものである。その他広東省北部山地には、現在でも、乳源瑶族自治县、連山壮族瑶族自治县等、著名な茶産地は形成されていないが、各自の自家消費の茶としての茶は多く認められる。



第2図 金秀瑶族自治县坳瑶族の日干し茶の喫茶情景

—写真右は日干し茶—

広西壮族自治区の茶

広東省から西方へ移住した瑶族は、広西壮族自治区内の山間地に移っており、現在の金秀瑶族自治县をはじめ、南部には十万大山があり、茶産地としても、西部の凌云県の白毫茶、東部の賀県産開山茶、桂平県の西山茶、金秀瑶族自治县の白午茶等々中国茶として、まぼろしの名茶とまでいわれているほどである。

広西壮族自治区内略々一円に分布する瑶族には、地の利の良否もあって、茶産地とは成り得ないが、自家用の茶としては、各家庭に必ず茶の木は植えてあり、茶の枝を折り取って、日干しにして、それを煎じて飲む者もあり、瑶族の伝統的な喫茶習俗としての「油茶」も各地に継続されており、簡単に茶の葉を油いためとして、しょうがなどを合せて煎じるものから、様々な具を混ぜるものまでである。

この様に瑶族の茶は日常生活に不可欠なものとなっているが、広西壮族自治区を構成する絶大多數の壮族には、茶の利用は日常化していない。これは、壮族は傣系の民族であり、平地の稲作民族で山地での茶とは、縁遠かったものと見られるからである。

広西壮族自治区内の略全域に分布する瑶族には、自家消費、あるいは、小規模茶業は成立して

現在の雲南省の瑶族は、主として明代前後に移住してきたもので、中には現在でも移動を続けているものもある。雲南省思茅地区の江城県には、一九九四年二月現在でも、移住直後で、農耕地はもちろんのこと、家屋も建築中のものもあった。こうした建設途上でも瑶族には、必ず茶は飲まれており、近隣の半野生の茶樹から造る茶と、市場からの購入で間に合せている。

雲南の茶は、主として明代頃からの開発が中心となっている。西双版纳傣族自治州東部の勐腊県が中心であり、勐腊県内では易武を中心として、その周辺の六ヶ所が、六茶山として雲南茶業がスタートしている^⑤。この易武の茶の開発に瑶族が深いかわりをもっており、西双版纳を土司として納めていた、傣族の支配下に移動して来た瑶族が茶造りを始めている様である^⑥。同書には、瑶族の項に「据瑶族代表馬二，周二談，瑶族是由広西進到鎮越的。進来的路綫是由広西西南進至云南広南，住了一些時候，因生活困難，再進至鎮越。伝説是因爲広南没有可耕的山地，時時在打听什公地方好。后来有一介商人告知，鎮越茶山好謀生活。瑶族就要到鎮越来，但不知路綫。商人就說你們若賣了我的這匹跛脚騾子，牠就会帶路，這匹騾子是常到茶山去的。茶山有很好的草，騾子很喜歡去茶山。…」这越は、現在の易武であり、勐腊県の略中央にあり、当時は茶の取引の中心となっていた所である。ちなみに傣族の用語で勐は、茶の葉、腊は産地の意味の様である^⑦。

(2)東南アジアの瑶族

ベトナムの瑶族と茶

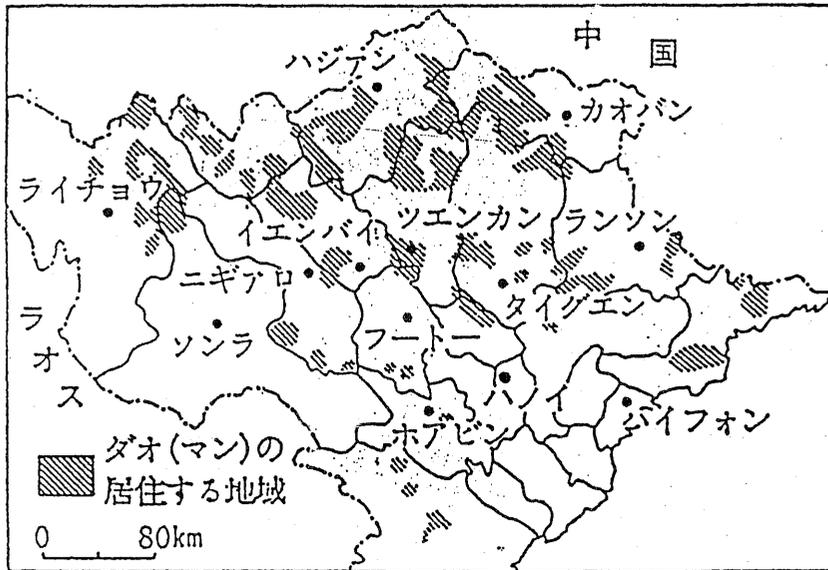
ベトナム北部の瑶族（ザオ族）は、十七～八世紀に現在中国の広西壮族自治区南部の十万大山、西部の百色市、雲南省の東部文山壮族苗族自治州、広南県経由で移住した人達、さらには、紅河哈尼族彝族自治州の金平県辺りからの移住が多い様である^{⑧⑨}。

こうした移住者の中には、ベトナムに定住した者もあれば、さらに、西へ進んで、ラオスやタイ国へと移った者もある。

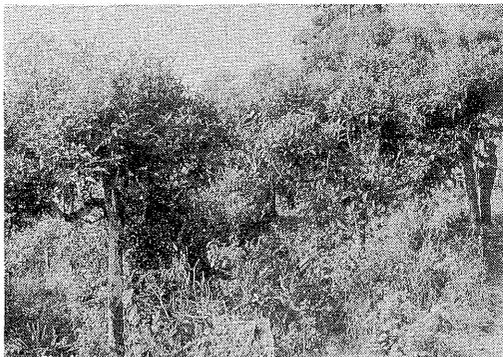
現在ベトナム北部に住む瑶族は、中国の過山瑶族であり、盤瑶族と云われる人々であって、ベトナム北部山地の略々一帯に定住している。そして、この定住地の殆どが、大小の差は有るが、新旧の茶産地であって、フランス統治時代（一八〇〇年代）頃に山地の利を活かして、茶の生産が行われたものと思われる。

一九九四年十二月、一九九五年十一月～十二月の調査でイエンバイ省（YENBAY）のソイザン（SOISAN）バクタイ省（BACTHAI）ダイティイ県（DAITII）、ティエンクワン省（TUYENQUANG）ソンジュオン県（SONDUONG）、北西部のハー吉安省（HAGIAN）カウボー村（KAUBO）等の調査結果から見ると、これら各地の瑶族は、山間地に千枚田の様に水田を開発し、稲作農民化して、年間の主食米を自給している。

現在は、稲作農民化しているが、三代から五～六代前までは、周辺山地で標高800メートル余の山頂近くに住んでいたと話してくれた。現在も、その山頂には自生茶を中心として、栽培茶があり、明らかに茶畑として成り立っていたことを示している。自然林中の茶樹から種子を採り、その周辺に播いて茶畑として来たものである。しかし、現在は、水稻作となり、低地の水田近く



第5国 ベトナム北部の瑶族の分布



第6図 放置されたベトナム北部の旧茶畑



第7図 ザオ族(瑶)に茶は欠かせないが 檳榔も欠かせない

に居住し、茶畑は水田の周辺丘陵地が利用され、新品種を導入して、経済作物としており、山頂の茶樹は、自然状態に放置されている。

これらの瑶族は、主食を米として、野菜類を自給し、鶏などの肉類が常食となり、豚は主として換金用とされている。

嗜好品としての茶は、中国の華南地方の習俗に近く、直径三センチ、深さ四センチの小ぶりの円筒形の茶碗で、丸味をもった取手が横についている。日常の飲用茶は、中国式の釜いり茶で、

直径十センチ、深さ十五センチ程の急須を使い、日本人には飲めない程の濃いお茶を飲む。このお茶が、来客時、食事後等一日に五～六回余り飲まれている。

ベトナムでは、喫茶の習慣が伝わる以前から、日常的に檳榔が噛まれており、この習慣が外来定住の瑶族に普及したものと見られる。瑶族は、本来山地焼畑民族であり、喫茶の習慣であったはずであるが、ベトナムに来て、水田稲作と、ベトナム人（京族）との交流が始まり、自然的に京族の檳榔の習俗を体得したものと見られる。しかし、この檳榔を噛む習慣は、主として老婦人に限られる程で、若い女性や男性には見ることが出来ない。

ラオスの瑶族と茶

ラオスは、東南アジア山地として、自生茶の分布は認められるが、茶の生産地としては、殆どその名が知られていない。茶の産地形成に至るほどの消費が無いものと思われるわけで、ラオスの主要民族たるラオ族などに、喫茶の習慣が不十分なことを物語っている。

茶の大産地形成には至らないが、茶の生産、消費に関して、大森正司の最近の報告がある^⑩。「ラオスの茶産地は北と南に数ヶ所あり、北では主に伝統的な茶、南では主に紅茶が製造されている。…ラオス南部のチャンパーサリの茶は、一九四二年にベトナムから茶の樹を移植したことに始まる。…北部ルアンナムターでは二種の竹筒茶があった。一つは茶の生葉を蒸した後、竹に硬し詰めて乾燥したもので、中国雲南省で見出された竹筒茶（団茶）と同様のものではあった。これはいってみれば緑茶を固めたもので、微生物は関係していない茶である。もう一つは同じく中国雲南省布朗族で見出された竹筒酸茶と同じもので、食べる漬物茶ともいうべきものではあった。しかし製法はタイのミヤンに類似していた。」と大変貴重な報告である。

「北部ラオスにはラオ族をはじめ、メオ苗族、ヤオ（僑）族、カ・ムー族（プ・テン族）など多数の種族がそれぞれに立地を異にしながらい交って分布している。そこは種族構成の複雑な地域であり、文化的にきわめて複合的な地域である^⑩。」ラオス北部の民族と茶のかかわりも複雑なものと思われるが、同地方の瑶族には、きわめて原初的な喫茶法が、瑶族に伝承されていることを、報告している。前掲^⑩。すなわち「嗜好品に茶 Cha と阿片があり、茶は数葉を火にかざして焙じ、熱湯に入れて使用する。」もので、日本でも西南暖地の山間地で山仕事に出かける人々の間にも、見られる喫茶法である。茶の利用法としては、きわめて原初的なものであり、瑶族と茶のかかわりの一端をうかがうことが出来る。

タイの瑶族と茶

タイ国の茶に関しては、近年になって中国式の緑茶をはじめ、ジャスミン茶、烏竜茶まで造られるようになって来たが、伝統的な茶としては、噛み茶が広く知られている。

噛み茶には、bitter type（苦いタイプ）とsour type（酸っぱいタイプ）の二種類がある。前者は、かなり生長した茶葉を一～二時間蒸して、水分の少ないものを、十センチ四方くらいの塊に縛って出来あがる。後者は、同じ様に蒸した茶の葉で、比較的水分の多いものを、十センチ四方の塊に縛ってから、土間などに掘った空井戸の様な穴（直径一～二メートル深さ四～五メートル）に詰め、上部に蓋をして土をかぶせ、二～三ヶ月放置する。その間に茶の葉は、自然に醗酵して

酸ばい茶となる¹⁹⁾。

こうして造られる噛み茶は、主として北部タイ地方で生産しており、古都「チェンマイ」の市場など、食品売場の一角に並んでいる。

タイ国で、何故噛み茶が造られ、利用されているのか、しかも、それがタイ国の北部に残っているのか、多くの疑問が生じるが、これについては、次項のタイ族の茶で詳述することにした。

タイ国北部の大部分が、山岳地帯であり、そこには、ヤオ族をはじめ、メオ族、アカ族、カレン族等の山地民族が、焼畑耕作を主として、生活しており、しかも現在でも移動する民族もあり、彼等の定住策としての茶が取り上げられている。「北部ナン縣の山中に住むティンヤ、同地方、東北部、西部に散在するカムクは上述の典型的な焼畑法で陸稲を作っている。…家の廻りには減多に草木を栽植しないが、しばしば山腹に噛み茶のミアングを栽培して米や塩に換へる²⁰⁾。」…とあり、噛み茶が、山地民族の経済的産物として、伝統的産物となっていた様である。

さらに同誌には「苗や傜はここ半世紀前からの若い移住者で、北緯一七度以北のドン・パヤー・エン山脈及び北部タイ東半の山上に五～六千人焼畑を行っている。」

この地方では、瑶族の移住以前から、噛み茶の存在を示しているが、瑶族と茶のかかわりの深いことを物語る報告もある。「…安攻の儀式を主宰する家では、^{シフミエントム}設鬼大(大司祭)の指示に従い^{シフミエントム}設鬼小(小司祭)も手伝って屋内の土間に祖先墓を模したツコアンという家を造る。その土間はヤオ族によって男の土間(東庁)と呼ばれ、鬼牌または鬼柏といわれる神棚が安置されている場所であるが、そこに先ずこれから供養しようとする祖霊の数だけ根のついた茶の若木を並べ立て、粘土状の泥でその根元を覆う²¹⁾。…」とあり、茶の木が瑶族の祖霊供養に大事な役割を果たしている様である。

瑶族には、婚姻の儀礼に、茶が欠かせない種族もあり、人生儀礼と深いかかわりをもっていることが伺えるわけで、これらが、瑶族の伝統的なものなのかについては、今後の研究に期待したい。

瑶族の移動と茶

現在、瑶族は中国大陸南部から、東南アジア大陸の山地へと広く分布しており、何れの地に於ても、茶のある生活には変りなく、茶との深いかかわりを物語っている。

製茶法から見ると、原初的な日干し茶、火焙り茶、蒸し製の餅茶、釜いり茶、醗酵茶の各種等々があり、その居住地に適応した製茶法が導入されている。それは、茶の生産は、自家用以外は商品として、販売しないことには、経済的価値は無に等しい。茶が飲料として商品価値を生み出すには、居住地周辺に消費地が有ることと同時に、そこへの運送の手段が形成されていることは前提である。

したがって、瑶族によって形成された茶産地も後発茶産地が、地の利を得た所に開発されると、旧産地はその経済的価値を失うことになる。雲南省の明代から清代にかけて、一大発展をした六茶山も、その後が開発された、勐海県や勐腊県の新産地に、主産地としての名声が移り、茶畑も自然な状態になっている。この例は、中国に限らず、ベトナムに於ても同様であり、現在の主

要産地は、首都ハノイから100キロ前後の距離の丘陵地に開発され、中国との国境山地に於ける茶産地は、茶樹の自然林と化している。一方山地から平地部あるいは、丘陵地に降りて生活する瑶族には、周辺山麓の丘陵地に茶畑を移しているが、消費地への距離と、そこへの道路整備が伴わず、茶の経済的価値は、低下しつつある。

瑶族には、茶以外に山林資源を活かす能力と、経験が伝統的に備っており、葉草類を専門的に扱う村、林木、竹材の取扱い等々、その居地の自然条件をたくみに活かしている。

こうした瑶族の民族的なアイデンティティーは、瑶族の本来の特性と共に、山地と平地、消費地との交流等、そこには漢族をはじめ、ベトナムの京族、タイのタイ族等と他民族との共存共栄が、経済関係を基調にして確立している。

そして、そこには、瑶族に共通する精神文化としての道教的宗教心が、生活の基本となっており、道教のもつ自然思想が、根強く働いているものと思われる。この自然思想が、山地を活かし、異民族との共存共栄を計り、瑶族としての民族的特性、アイデンティティーを異民族の間に活かし続けることの、可能なエネルギー源となっているのではないかと思う。

最後に嚙み茶“ミエン”の用語について、一考したい。

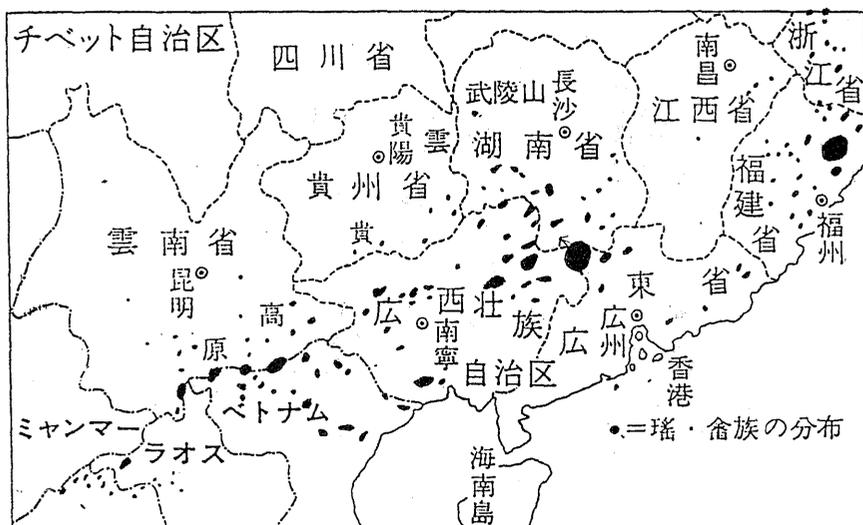
中国の雲南省をはじめ、タイ国、ラオス、さらにミャンマー等で造られている「嚙み茶」は、製造する民族は異っても、「ミエン」を基調とする発音となっている。これは、タイ国の嚙み茶、あるいは、ミャンマーの食べる茶も、その源が同一であり、この両茶に限られた用語であるといえる。そこで考えられるのが、瑶族がもつ自称の「ミエン」であり、「これに関しては、北部タイのヤオ族集団全体を通じて、完全に統一されている。すなわち、〈ユー・ミエン〉(lu・Mien)という呼称である。〈ユー〉は、〈傣〉を〈ミエン〉は、〈ヒト〉を意味し、かれらの間では、日常はたんに〈ミエン〉といえ、自他の人々を含蓄する^⑩。」しかし、總べての瑶族にミエンが適応するわけではなく、「…北部タイのユー・ミエンが、雲南の(頂板傣)、トンキン(マン・コク)その他の(板傣)群、広西の(盤古傣)、(板傣)(盤傣に連なり、広東に至って、所謂(過山傣)に辿りついたわけである^⑪。」

瑶族の自称ミエンと、嚙み茶、食用茶のミエンの関係について、雲南省をはじめ、東南アジア大陸山地民族が、茶という飲み物、さらには、食用とする用途の知らない頃に、瑶族によって伝えられた故に、ミエン(瑶族)のもたらしたものであるということで、ミエン=嚙み茶であり、同類の食べる茶の固有名詞となったものではないか、と推測するが、素人の当推測としかいえない。言語の専門家の意見をお伺いしたいものである。

苗族の茶と酒

瑶族と苗族は、同語族として、言語系統をはじめ祖先神話などが共通しており、民族の分布も、中国の貴州省を中心として、湖北省湖南省、広西壮族自治区、雲南省、さらに、ベトナム、ラオス、タイ、ミャンマー等国境を越えて東南アジア大陸部の山間地へと、拡散している。

こうした、両民族の共通点が多いが、こと茶の利用に関しては、両者間には殆ど共通点は見出せない。すなわち、苗族には伝統的に喫茶の習慣も無ければ、茶の栽培、製造も見られないわけ



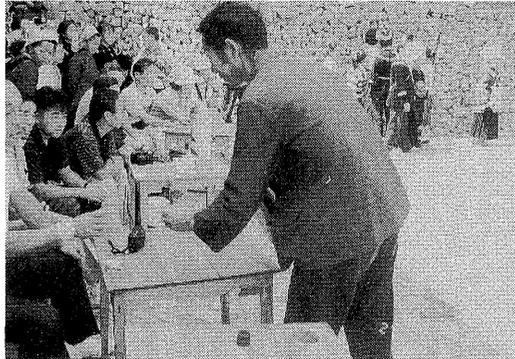
第8図 瑶族の移動図（松下）

で、同語族にしてはと理解に苦しむ。

もちろん、現在では苗族にも、茶の生産は見られるわけで、貴州省の都勻市、湖北省の恩施県、湖南省では古丈県等、茶産地では苗族も茶の生産に従事しており、各地の経済開発、発展に加わっている。しかし、これらは中国政府の経済開発政策の一環として、地域開発に茶の生産策が導入され、その地域に住む民族に、茶の栽培、製造を奨励した結果であって、苗族の本来的なものではない。浜田秀男^⑩は「筆者が高地ラオスのシェンカンの周辺山頂に住むメオ族をたずねたが、市より十数キロ山又山を上下して到着したメオ族の居住地では茶や白湯の接待もなく、その代りに用意された数個の小ミカンと数節の甘蔗数本をもって喉をうるほしたことがある。塩辛い食事のあとにも又茶水の用意がなかった。」と報告しており、苗族の茶を扱う習慣の無いことを示している。

私も一九九三年八月、貴州省の名茶産地の都勻市を訪ね、次いで凱里県の名茶産地を訪ねたことがあるが、布依族など一所に茶畑で働いている、苗族を見ることが出来たが、凱里県で、苗族の村を訪ねた時の体験には、お茶は出なかったことを覚えている。それは、各地の苗族にお茶を飲む習慣の無いことが明かになっていたため、苗族が多く住む凱里県ではどうか、と注意していたからである。

苗族の村を訪問すると、村民の歓迎の意もあって、バスを降りる停車場に、水牛の角から造った容器や、グラスなど思い思いの器に、地酒の蒸溜酒を注いで待ち受けてくれる。さらに、水田の畦道を民家に行く途中でも、同様の接待があり、民家の入口ではひととき大きな水牛の角になみなみと注いだ酒を持って、待ち構えており、専ら酒の接待であった。その後広場に集って、いろいろと苗族について、聞くだんになると、村人からお湯のポットで、グラスが出され、やっぱ



第9図 苗族の日常生活に茶は見られない（貴州省凱里県）

りお茶かと思いきや、白湯そのものであり、遂にお茶は見る事が出来なかった。

苗族にお茶の習慣の無いことが、実体験出来たわけだが、前掲の浜田秀男は「…このメオ族は茶を知らぬのでなく、むしろ北方雲南より近年数百キロ南下移住してまだ余裕がなかったのであろうと憶測したのである。」と記している。これは、余裕の有無でなく、喫茶の習慣が無いことを示しているわけで、ラオス山中で茶の木が育たぬはずは無いはずで、喫茶の習慣があるならば、庭か畑の周囲に茶の本を一本や二本は植えてあるはずで、瑶族には、茶畑は無くとも、茶の木の数本は、住宅の近くに植えてあり、その枝から茶の葉を取って、自家用にしており、来客時にもその茶が使われる。

こうした、両民族の違いについては、中国をはじめベトナム、ミャンマーなどで体験したものであり、同語族でのこうした違いについての理解に苦しむところである。

苗族と瑶族は、同語族であっても、現実に生活の場は、苗族は1,000メートルを越える高地に住んでおり、瑶族はそれより下方の500メートルから1,000メートル辺りが居住地となっている。同じ様に焼畑耕作ではあるが、苗族には「とうもろこし」が中心となり、瑶族には「とうもろこし」より、「あわ」、「ひえ」、「陸稲」が多く、水の便があれば水稲作もあり、生活の場に巾がある。

さらに、歴史的に見ると、苗族には漢族との間に、斗争はあっても、共存共栄は見られないが、瑶族にはこの点、漢族との交流もあり、山地と平地の共存共栄が成り立って来た様である。これは、中国各地の瑶族に共通のもので、漢文化の受容度が高く、現にベトナムやタイ国に住む瑶族、特に老人には、漢字が通用し、日本人との間では漢字による筆談も可能である。これは、多くの瑶族研究者が、各地で実感することであり、苗族と瑶族の大きな相違点の様でもある。

茶の木も1,000メートル以上となると、十分な生育が充分可能とは云えなくも無い。したがって、茶畑としての生産は成り立たないかも知れないが、自家用程度のものならば、育つはずである。こうした、両民族の住み分けが、茶の利用の有無となることも考えられるが、最大の要因は、歴史的な経過に有るのではないか、と思われる。やっぱり漢族による茶の利用を、日常生活をはじめ、経済面にも取り入れ、物心両面に茶が活かされることになったものである。もちろん、両民

族の住む地の気候風土、さらに食文化とも深いかかわりをもっており、瑶族の持つ道教信仰なども、かかわりをもっているものと思われる。

二. タイ語系諸族の茶と檳榔

(1) 中国の傣族と茶

広西壮族自治区壮族の茶

壮族は、古代より南方の越人といわれ、伝統的な建築様式や、銅鼓、古代越人の迷信などが継承されている^⑱といわれている。したがって、広西壮族自治区を中心に1,200万人余が住んでおり、中国の少数民族中では、最大の人口を保持している。一九七七年の統計では、広西壮族自治区を中心として1,100万人余が住んで居り、それも、省都の南寧、百色、河池そして、柳州の四地区に集中しており、この他に雲南省の文山壮族苗族自治州に八二万人余、広東省連山壮族瑶族自治县に35,000人余、そして、貴州省黔東南苗族侗族自治州に一人余、さらに、湖南省南端の江華瑶族自治县に約四千人と広西を中心に分布している^⑲。

壮族は、稲作を中心とするタイ族系民族で、茶の生産には直接タッチしていないため、各地の壮族には、茶の生産は認められない。現在でも、広西壮族自治区区内で、主要茶産地は瑶族の住む山間地に多いが、近年の経済開発の一環として、横県をはじめ、灵山、苍州、百色、そして柳城などに開発がなされており、漢族を中心として、苗族、壮族も加わっているが、中心は漢族となっている。

これは、伝統的に壮族には、茶の利用が無く、茶の生産技術に欠けているわけで、新技術として導入されることに、消極的な面があるのではないかと思う。

壮族には、伝統的に喫茶の習俗が認められず、主食を米飯として、副食に豆類や野菜類、各種肉類、それに飲みものとして酒が中心となっており、お茶を飲む習慣は、最近になって一部に取り入れられている程度である^⑳。

壮族の伝統的な嗜好品としては、檳榔が古くから用いられており、「…兩奥飲食嗜好不同食檳榔多同客至不設茶禮以檳榔…^㉑」とあり、茶より檳榔が常用されていることを物語っている。さらに、「瓊人每以檳榔代茶榔代酒以款賓客…^㉒」とあり、広東省、広西壮族自治区では、檳榔が広く使われていたことを示している。

一方壮族には、茶の利用は伝統的に認められないが、労働歌として「菜茶歌^㉓」があり、劉姉妹の名声が聞かれるわけで、壮族の歌謡に茶の生産とは別に歌われているのではないかと思われる。それは、嚼檳榔として「宋代壮族，漢族好嚼檳榔，客至不斟茶，唯以檳榔爲礼。苍州，防城，上思，寧明等地農村壮族，建国前仍有部分中老年妇女嚼檳榔，建国后已少見^㉔。」とあり、壮族には檳榔が、茶以前の嗜好品として、少なくとも建国以前までは、日常的に利用されていたことが明らかである。

現在の壮族には、檳榔の習慣は日常的には見られないが、かつての習慣の存在を示す様に、檳榔樹は広西南部には、所々で散見することが出来る。壮族が、タイ族と同系族であり、水田稲作

民族として、平地を主な生活の場としており、山地産物としての茶には、直接かわりの無かったことを物語るものである。

雲南傣族の茶と檳榔

雲南省の傣族は、西双版纳からミャンマーとの国境沿いに、徳宏傣族景頗族自治州に至る各地を中心に分布しており、雲南省南部地方の略々全域に分布している。これら傣族は、壮族、侗族等と同族系統であり、その古くは古代百越の民といわれている²⁵。したがって、その生業の主体は平地稲作にあるが、雲南省南部瀾滄拉祜族自治県や、同西南部の徳宏傣族景頗族自治州には、山地に住む傣族（乾傣族又は漢傣族）、さらに、西双版纳傣族自治州の勐養には、花腰傣もあり、いずれも水稲作を中心とする生業が成り立っているが、山地の乾傣族には、茶の生産に古くから継承しているものもある。

平地水稲作を中心とする傣族には、伝統産業として、あるいは嗜好飲料としての茶は見られず、主として檳榔が活用されていた。「元代傣族以“檳榔蛤灰，苻菴叶奉箕客”，明初就兼用茶敬客了，這就是《百夷伝》所說。“宴会，先以沽茶及萎叶，檳榔進之。…明末，已知將茶叶蒸而成团，烹瀹以飲了²⁶。”とあり、雲南省の傣族には、明代初期頃までは、茶より檳榔が用いられていたことが推測される。

現在の西双版纳傣族自治州の傣族には、各地で茶産地が見られるわけで、ことに勐海県には、水田の周辺丘陵地には、略々全域と云える程、茶が生産されている。これは、一九五一年、雲南省茶葉科学研究所が、思茅から移築され、勐海地方での茶業への関心が急激に高まった結果と考えられる。

一九八〇年八月に初めて、西双版纳を訪問した時には、勐海の傣族の集落周辺丘陵地が、焼き払われ、茶の新植が盛んに行なわれており、各地に茶畑の造成が見られた。それが、一九九四年二月訪問時には、勐海県周辺の丘陵地は殆ど茶畑と化しており、傣族による茶業開発が、急激に進んだことを物語っている。

一方山地の傣族である、乾傣族には古くから、山地の利を活かして、茶の生産が古くからあり、瀾滄拉祜族自治県の景万郷の山中には、直径五〇～六〇cm余と見られる茶の老木が繁っており、明らかに茶畑であったことを示している。これは、近くに住む乾傣族が作っていた様であり、元代の八百媳婦国の景辺王国の一環ではないかと推測される。この景辺王国は「八百大甸軍民宣慰使司，民皆棘夷²⁷…」とあり、現在の族傣であり、乾傣族として茶を作っていたことが考えられる。

現在は、景辺郷の入口早谷坪に大々的な茶畑が開発され、奥地の景辺郷の茶畑は、自然林へと変わりつつある。

現在の西双版纳の傣族には、檳榔の習慣は殆ど見ることは出来ないが、西双版纳周辺に住む諸民族には、老女の間に檳榔の習慣が見られる。それは、傣族には早くから仏教の普及があり、仏教に伝わる殺生、すなわち血を連想する檳榔が、忌み嫌われて来たものではないかと思う。したがって、仏教の普及していない周辺民族には、今も檳榔の習慣が、老婦人間に継承されているわ

けである。

雲南省の元江哈尼族彝族傣族自治には、現在でも、かつて傣族が利用していた檳榔樹が、同県域の墨江哈尼族自治县への街道筋に三〇本程残っており、元江の傣族老婦人間に少数ながら、利用する人もあるが、殆ど利用していないとのことである。かつて、この地方に住む傣族には、かなりの利用もあった様で、元江の特産品の一つになっていた様である²⁸。

(2)東南アジアのタイ族

ベトナムのタイ族

ベトナムのタイ族には、白タイ族と黒タイ族に二大別され、少数ながら赤タイ族あり、白タイ族は主として、ラオカイ西方から西南に分布しており、黒タイ族はイエンバイ西方からラオス国境地帯に多く、赤タイ族はハノイ西南部に分布している²⁹。

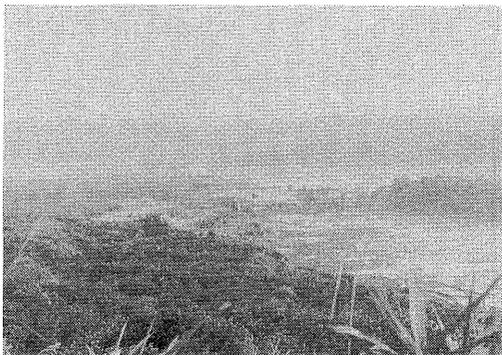
これらタイ族は、北方の中国雲南省から、紅河沿いにベトナムに移動しており、やがて紅河北西の肥沃な地帯に住みつき、現在に至っている。彼等は、主として水田耕作に従事し、鶏や豚、牛などを飼育し、役畜としたり、換金動物としている。

一九九五年十二月一日、バックタイ省のダイドウ県ドイ部落の赤タイ族を訪問し、次の様なことが明らかになった。この集落は、四〇年程前にこの地に移住しており、主として水田経営を主体として、キャッサバを丘陵地に作り、茶は自家用が主となるが、時には市場に売りに出すこともあり、家屋の周辺、畦畔などに茶の木が目立っていた。自家用の茶は現在、朝晝晩と飲むが、その由来などについては明らかでなく、祖先の代から植えたものであるという。

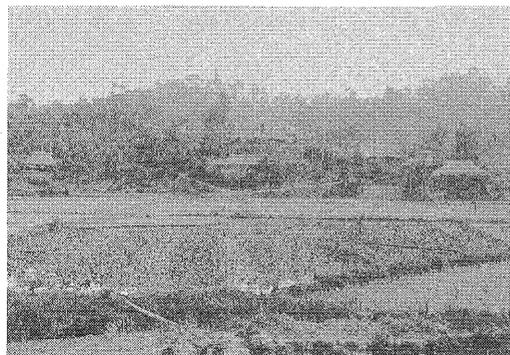
来客ともなれば、先ず眞先にお茶を出すが、その出し方は、小さな茶碗に濃いお茶で、京族のそれと何ら変わらない。

植えてある茶樹は、シャン種系統で、比較的葉肉が厚く、ごわごわした葉で、日本の小葉雑種より大きく、渋味も強い様である。

この集落では、檳榔は二～三年前から、それも一部の老婦人に好まれている程度で、一般的で



第10図 西双版纳傣族自治州の傣族によって開発された茶畑



第11図 ダイドウ県ドイ部落赤タイ族風景

は無いという。そのためか、道端や炉端に吐き出した檳榔の赤色は、何処にも見る事が出来なかった。

ちなみに、この集落は人口一六〇人、世帯数三六戸という小部落ながら、集落の前方に広がる水田で、主食は充分にあり、生活にはかなりの余有がある様に見受けられた。したがって、京族的な喫茶の習慣も定着しているわけで、檳榔の習慣は消滅したものと思われる。

ラオスのタイ族

ラオスに住むタイ族は、ラオ族と呼ばれており、ベトナムに住むタイ族と大同小異の生活をしているが、「ラオス人の食事は極めて簡素である。nep という麪を煮て塩と共に喰う。副食物としては野菜及び魚を生の儘で辛子と共に、又は塩漬にして食用に供する^⑩。現在のラオス人の生活が明らかでないが、大きな違いは無い様に思う。同書には、生水が唯一の飲料である、と記されているが、現在はお茶も飲まれているものと思う。

しかし、「彼等の住居の周囲には茶園とし、韭、玉葱、サラダ等の野菜類、バナナ、檳榔等の果樹類を植える。」とあって、檳榔の利用があることを伺うことが出来る。檳榔を噛む習慣は、雲南省の傣族が仏教化と共に消滅したものと考えると、ラオス人は、小乗仏教徒とはいえ、むしろ精霊崇拜徒といえる程で、こうした状況から見て、檳榔の習慣が完全に消えた、とはいえない様に思われる。

タイ国のタイ族も、水稻耕作民であり、伝統的な嗜好品としては、茶よりも檳榔があったはずで、それが茶に代ったものとして、噛み茶が造られたものと推測するものである。

タイ国は、早くから仏教が普及し、檳榔の習慣も消えており、現在では北部山地の少数民族に見られるくらいとなり、その北部では、噛み茶の生産があり、檳榔に代って来たものである。

現在のタイ国には、噛み茶も徐々に減少しつつあり、それに代って「ジャスミン茶」、「烏竜茶」も造られる様になり、その変容は著しいものがある。かつて、チェンマイの市場には、噛み茶が所々で売られており、観光客の目にも珍らしく映っていたが、最近の市場には、余程注意深く探さないと、入手出来ない様であり、噛み茶の習慣も年毎に消えている様である。噛み茶の民族的調査の必要性を痛感する。

タイ族が、東南アジアを西進し、その西端は、インドのアッサム州のアホーム族であり、さらにアルナール・ブラデッシュのカンブチ族といわれる。

ミヤンマーのタイ族

ミヤンマーのタイ族は、シャン族といわれ、ミヤンマーの南、北シャン州に多く住んでおり、俗にいられているシャン高原の中心民族である。シャン族については、前掲^⑪で紹介した様に主として水稻耕作をもって、生業の主体としており、他に果物、野菜、煙草、胡麻等もあるが、米の生産は大宗をなしており、時には、中国の雲南省の市場に運んでいた程である^⑫。

ミヤンマーのシャン族には、伝統的に茶の生産は無いが、山地のパラウン族の造る茶をマンダレの市場などへ売る、仲間商の役割をもっている。一九六二年～一九六三年のビルマ調査では、シャン族による茶栽培は、北シャン州のシーポー附近に新しい産業として着手していたが、最近

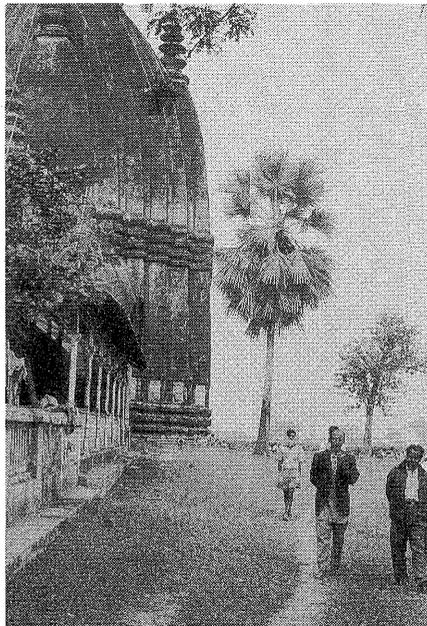
ではかなりの産地になっている様である。

シャン族の「農業としては、棉、茶、稲を栽培し、また商業に従事し、その外玉、琥珀を採取し、金属細工に巧みである。…結婚は男女の意志が通じると、女は先ず男の家に来り、男だけがその婦家に茶と塩を進物として訪問し、求婚する。…結婚式には、夫の方は塩と茶と金を持って婦家に至る。金は女の親がとるが、村の長老はその塩と茶と持って外に出て、大地と日輪と天とを祭り、結婚の照覧を爲さんことを祈誓する^⑩。」

シャン族には、茶が生業の主体とはなっていないが、人生儀礼の婚姻に茶が重要な役割を果しており、茶との深いかわりが想定される。このことは、雲南省の徳宏族（パラウン族）にも共通することであって、茶を通じてのシャン族とパラウン族のかわりを、推測出来る様に思われる。

タイ族の西進が、アッサムのアホーム族となるが、現在のアホーム族は、絶滅寸前の民族といわれ、一八〇〇年代初期イギリスが、アッサムを併合する以前は、アッサム王国として、君臨した面影は全く無い。

アホーム王国の在った頃は、当然ながら、アッサムに茶業が開発されていたわけで無く、一面のジャングル地帯の中に、王城がそびえていたものと推測する。現在のアホーム族は、近代産業としてのアッサム紅茶に刺激されて、紅茶を飲む者も有るが、大部分は、紅茶産業とは無関係な暮しで、アッサム地方特有の檳榔が嗜好の中心となっている。



第12図 アッサムのアホーム族の旧王城

Ⅲ. チベット・バーマ系諸族の茶と檳榔

(1)雲南のチベット・バーマ諸族の茶

雲南の竹筒茶

「チベット系の民族が、カム高原の南端から雲南に入りこんでいることは、すでに見たとおりである。この雲南および四川南端の高山地帯に広く分布しているのが、これからのべるイ語族系の民族である。イ語族系諸民族は、高原農牧民的チベットの文化を基調としながらも、その主要居住地が雲南省であるため、タイ族を代表する河谷居住水稲耕作民とも接触して、各族のおかれた条件に応じて、多少の程度の差はあれ、南方農耕文化的要素の混入も見られる一群である^③。」

この南方農耕文化的要素の中に、茶の栽培、製造そして、喫茶の習俗も取り入れられているわけで、唐代の雲南省方面の諸蛮族について記した『蛮書^④』には、「茶出銀生城界諸山、散牧無採造法。蒙舍蠻以椒薑桂和烹飲之。」とあり、銀生城は、現在の「景東県」といわれており、大理に栄えた「南詔王国」も、その勢力範囲は、昆明西南の景東辺りまでになっていた様である。この景東には「至今、在景東の無量山、哀牢山仍有許多栽培型和野生型の古老茶樹。南詔設銀生節度后、景東茶叶声名盛朽一時^⑤。」とあり、これらの茶樹が南詔王国時代からのものか否かは詳かでないが、雲南大葉種に属する野生型のものから、半栽培型等があり、長葉緑葉茶、冷遠白茶、緑葉茶、さらに小葉緑茶等々の名茶が造られており、花山大茶樹は、標高1,700メートルの高地に樹高十メートル、枝張も八メートル余にも達する、野生茶樹もあるという。

この景東は、イー族を中心とする自治県であり、イー族固有の喫茶、「香香茶」がある。香香茶は、素焼の「焼茶罐」が使われ、茶と共に豚肉、花椒、辣子等が一所に煮込まれたもので、お茶の味もさることながら、混ぜ物の香味が勝っている栄養価値の高い飲みものとなっている。こうした飲みものが、『蛮書』にある飲み方とどうかわるかについては、それを説明する資料に欠けるが、中国の巴蜀地方に伝わる古い飲み方に通じるのではないかと推測する。それは、チベット系のイー族が、南進する時に巴蜀地方の喫茶習俗を体得して、雲南地方に来てからも、身近にある茶の木から葉を取って、自給自足的に飲んでいたのではないかと、と思われる。

雲南省には、チベット・バーマ系の民族として、哈尼族をはじめ拉祜族、景頗族、阿昌族、傣僳族、納西族、白族等々多くの民族が住んでおり、各民族固有の喫茶法をもっている。しかし、雲南省南部の茶樹の育つ地方に来た民族には、略々共通した喫茶法になっており、その一つが「竹筒茶」であり、さらに「焼茶罐」である。

竹筒茶は、竹の節間を利用して、茶葉の保存やお湯を沸かして、湯かんや急須代りに使うものであり、これはかつて雲南省南部地方に、土司として支配権を持っていた「傣族」の生活習慣を受容したものではないか、と思われる。

焼茶罐は、竹筒代りとなるもので、素焼の茶碗に取手を着けた様なもので、胴廻りが少し丸味をもっており、口はお茶を注ぎ易くなる様に「注ぎ口」が造られている。これは茶の葉とお湯を入れてから、炉端の隅に置いてお湯を沸かし、お茶にして飲むもので、竹筒より長持ちするわけで、竹筒の改良型であり、葉草などの煎じ用に使われて来たものである。



第13図 拉祜族に見られる竹筒茶

こうした、竹筒や焼茶罐も生活の近代化と、漢化により日毎に消滅しており、竹筒の利用は観光用と云える程になっている。

喫茶の習俗と共に、檳榔を噛む習慣も、チベット・バーマ系諸族に継承されており、これもタイ族の習慣の受容ではないかと思われる。

雲南省西部地方に住む「傣族」にはその生活習俗として、「傣族の飲食、主要食物爲包谷（玉米）芥子，小米，山禽，野豕。男女均喜喝酒，嚼檳榔^⑥。」とあり、喫茶の習慣も当然ながら、檳榔の習慣が伝統的に継承されている。酒，茶，そして檳榔は中国南部地方に於ては、各民族共に伝統的嗜好品となっているが、酒は何れの地にも造ることが出来るが、茶と檳榔は、その生育地に限界があり、それにかかわる民族にも、その由来や進路との深いかかわりをもつものである。

雲南省西双版纳傣族自治州に住む「哈尼族」も、勐海県景洪県では、主要な茶産民族となっており、南糯山の大茶樹がそれを物語っている。しかし、その製茶法の伝統としては、竹筒に詰める竹筒茶があり、竹筒や焼茶罐で飲む習慣が現在でも一部には継承されている。

さらに、彼等諸民族の集落には、老婦人の間に檳榔の習慣があり、集落内の路上には所々に檳榔の赤い唾液を吐き捨てた所が目につく。檳榔の習慣も若い女性には見られないが、四〇～五〇才過ぎ頃から、檳榔を噛み始めるともいわれており、喫茶とのかかわりが提起されるわけである。

雲南省の景頗族

雲南省の景頗族は、その大部分が、雲南省西南端の徳宏傣族景頗族自治県に集中しており、隴川県、盈江県、潞西県、瑞麗県、そして畹町市に分布している。景頗族の居住地は、大部分が1,500～2,000メートルの亜熱帯の山地で、山林資源を始めとして、油桐，茶樹，核桃，珈琲，柚木の樹木類から、芭蕉，紅桔，柚子，番木瓜，等の経済作物があり、特に茶に関しては、“茶山

野人”といわれる様に深いかかわりをもっている³⁷⁾。

したがって、製茶と共に喫茶習俗もあるが、「解放前の景頗族人一般不穿鞋，男女赤足。男女老幼都会嚼草烟，拌以石灰，檳榔，沙桔，凡熟人相見，必互相传递草烟，以示友好，成爲一種礼節³⁸⁾。」この習慣は、現在でも伝えられており、お茶より先に檳榔、噛み煙草が出され、もてなしの第一歩となっている。

徳宏傣族景頗族自治州の潞西県、三台山に住む景頗族には、隣接して住む徳宏族が、茶の木を植根や畦畦に植えてあるのと対象に、茶の木は見られず、喫茶の習慣も見られず、専ら噛み煙草と檳榔であり、男女共にそうした習慣である。したがって、ここに住む景頗族には、茶以前の生活が温存されているわけで、茶の文化と檳榔文化に関して、多くの疑問をもつわけである。

景頗族は、雲南省西部のミャンマーとの国境地域の山地、高黎貢山に住む「野人」といわれた民族であり、さらに、この山地には茶樹の自生もあって、茶山の別名もある山で、景頗族は、「茶山野人」と呼ばれている。したがって、茶とのかかわりも深い様に思われるが、自家用程度の茶を造るが、それより噛み煙草や、檳榔を噛む習慣の方が根強い様であって、茶の漢文化との結びつきから見ると、景頗族と漢文化の接触の関係を吟味する必要がある様に思われる。

雲南省の景頗族は、陸続きの「ミャンマー」の「カチン州」にも住んでおり、その名も「カチン族」と呼ばれている。



第14図 檳榔と噛み煙草のある景頗族

一九六二年の一月、「茶樹の起源に関する学術調査団」として、当時のビルマ最北部のカチン州に入り、州都ミトキーナより西方にレド公路をアッサム方面に向い、チンドウイン川上流の「タルン村」と「タナイ村」そして「タンブレ村」の茶樹を調査した²⁹。この地方の茶樹は、形態的には、アッサム種とシャン型であり、製茶法としては、竹筒に詰める「竹筒茶」であった。

カチン州は、東部を中国雲南省、西部はインドのアッサム州に接しており、この間にカチン族をはじめ、ラシ族、マル族、さらにアッサム寄りにナガ族系の民族も住んでおり、主としてチベット・バーマ系の諸族の地となっている。

竹筒茶は、アッサムのルヒット河沿いのナガ族系民族（一九九五年十月）チラップのタンサ族、当時のビルマ、ミトキナ北部タンブレのカチン族に見ることが出来たが、いずれも茶の葉を二〜三時間日干してから鉄釜などで炒ってから、竹筒の表皮を取り除いてから茶の葉詰めて、炉端の天井にて乾燥している。乾燥中に竹の特有な香気が、茶の葉に吸収され、特有な香気茶になる、といわれている。



第15図 ビルマにおける茶の分布と調査行程

この竹筒茶を竹を割って取り出し、湯かんで煮て飲む、というのが常習であった。

こうした竹筒茶の造り方や、飲み方について、カチン族独自に創造したもののか、と云うことになると、中国の雲南省南部の諸民族の間に伝わる、竹筒茶が民族間の接触、交流の中から体得したものと考えられる。

タナイ村で、焼畑にして茶畑の造成をしていたカチン族に聞いた所では、「茶の木が育っている所を探るには、パラウン族を先にたたせて探すとよい。彼等は、茶の木の育つ所を身をもって体得している」ということであった。パラウン族に茶の木の在りかを教えてもらい、自生の茶の木を残して、周辺の雑木を切り倒して、焼き畑にする。茶の木の無い所には、他から種子を集めて播いて茶畑を造成する。

カチン族は、ミヤンマー最北のカチン州を中心として住んでおり、ミトキノナ北方の「ウンマイ川」, 「リマ川」の上流域の通稻茶山に集落が多い。茶山は、茶樹の自生もある所で、自然環境に恵まれ、山中とは云え水田耕作もあり、カチン族の水田耕作の唯一の所でもある。

第二次大戦後、中国とビルマの国境協定が出来、茶山の一带はビルマ領となり、ここを中心として、カチン州各地の開発が進んでおり、その開発の先陣となっているのが、茶業開発である。古くは中国としては、野人として取扱われており、中国文化を受け入れる余地は無く、したがって、周辺諸民族との交流が中心となり、雲南省西南部の諸民族、とりわけ「徳宏族」などとの交流から、茶の利用を学び、豊富にある竹を利用して、茶の製造、保存等に応用して来たのではないか、と思われる。

一九六二年の調査時には、カチン州にもキリスト教の普及もあり、ナットの精霊信仰と共に粗末ながらキリスト教会としての建物が、目に入った。村の青年達が、私達一行を歓迎して、スコットランドのバブパイプの演奏してくれたのには、全くの驚きであった。この現象は第二次対戦時に、アッサムの東端「レド」から中国の「重慶」までの「援蔣ルート」を開設しており、その工事に山中のカチン族も集められ、イギリス軍による慰安ということで、バブパイプが紹介され、そのまま定着したものではないか、と思われた。

そうしたカチン族の変容もあってか、檳榔の習慣を見ることは出来なかったが、昭和十九年出版の『緬甸の自然と民族』には、「カチン諸族の男達は労働を厭い、日常の労務は悉く女性任せで食事が終るとよく寝てしまふ。起きていても大抵は煙草や阿片を吸い檳榔を噛むことしかしない。」と記してあり、古くは檳榔の習慣もあったことを物語っている。

モン・メール語族の茶と檳榔

(1)雲南の茶と檳榔

布朗族の酸茶と檳榔

布朗族の「主要有三種制法，散茶，將采来的鮮茶叶放鍋内炒或煮，基本上变色后，取出倒在竹席上揉，揉好后放在蔑色上晒干即成。竹筒茶，係歷六~七月將嫩茶尖摘来炒好，趁熱塞入竹筒中。然后放在火塘边烤，待竹筒的皮烤焦后，便可砍破竹筒食用。酸茶，布朗語“勉”。制酸茶七~八月將摘来的鮮茶叶煮熱，…装入竹筒埋土中，經一月即可取出食用。…酸茶…礼物互相餽贈^④。」

この製茶の制法と、茶そのものを食べるということから、雲南省南部の原初的の茶の利用と認め、茶の原産地に連動している人もある。

この食べる茶は、布朗族固有のものではなく、タイ国の「噛み茶」、ミャンマーの「食べる茶」等に共通するもので、茶の利用そのものから見れば、飲用以前の形態と見る事が出来るが、これら一連の「食べる茶」、「噛み茶」は、檳榔に代って利用され始めたものであって、茶の原初的利用とは云えない。

布朗族には、伝統的嗜好品として、古くから檳榔があり、「男女都喜嚼檳榔，用檳榔叶包上草烟，石灰，檳榔果，然后放入口中慢嚼，吐出的水至紅色，日久之后牙齒梁成黑色，檳榔性清涼…^④。」とあり、東南アジア各地の民族に見られる、黒歯の習俗と合せて、檳榔のもつ各種成分と、その効用が茶と近似しており、檳榔のもつ紅色の吐液が、不潔、不浄感を連想させる故に、茶に代ったものと見られる^⑤。

もともと檳榔は、平地の植物であり、傣族やモン・クメール語族に古くから伝わる嗜好品の様であったわけで、ことに傣族が雲南省南部、特に西双版纳の支配階級であった頃の習俗として、近隣諸民族に取り入れられたものと見られる。そして、その傣族が、その後漢化と共に一方では、仏教徒となり、檳榔の習慣は消失して食べる茶の習慣も漢族化の進展と共に飲用へと変って来たわけで傣族周辺民族、ことに布朗族には、その変容の過程が見られる、と云うことである。

一九九四年一月、西双版纳傣族自治州の勐海県、竜養郷の布朗族には、竹筒酸茶も見られたが、一九九五年二月に布朗山の曼梁郷を訪問では、竹筒酸茶は見られず、専ら噛み煙草と檳榔であり、村人の話しでは、「竹筒酸茶は竜養で造っているといわれるが、ここには有りません」ということであった。布朗族は、伝統的な茶の生産民族の様であるが、それは、布朗族が傣族化、さらに、漢化の傾向を帯びる様になってからのものではないか、と思われる。

勐海県の巴達郷には、野生の大茶樹が知られているが (*Cmeuia lrrwagineneis*)、その近くには雑木、雑草の生育する古い茶畑があり、かつて布朗族の造成したものと見られる。この古い茶畑の近くにダム工事が進行しており、やがては水没することになるが、こうした古い茶畑は、ダムに限らず交通、運送に便利な新茶産地の造成により野生状態に放置されるわけで、山地民族による古い茶畑、茶産地は自生茶と見違える様な野生状態となっている。

こうした、一連の変化は茶業生産をはじめ、喫茶習俗や生活文化にも徐々に変化を及ぼし、そこに残ったものが、あたかも原初的なものと見られるわけで、こうした扱いは充二分に注意吟味しなければならないことである。

徳昂族と佧族の茶と檳榔

徳宏族は、一九八五年に崩竜族からの改名で、現在は、雲南省西南部の徳宏傣族景頗族自治州潞西県三台山を中心として、同自治区の瑞麗、染河、隴河、保山、そして同区東南方の臨滄地区、鎮廉、耿馬傣族佧族自治県等のミャンマー国境地帯の隣接地に分布しており、ミャンマーのパラウン族とのかかわりをもっていることを物語っている。と同時にこの地方に於ける古い民族であり、茶の生産にとっても、古老的茶農といわれている。



第16図 竜養の布朗族に伝わる竹筒酸茶



第17図 徳昂族には檳榔が伝統的な嗜好品として定着している

「瀘西県芒市河辺及軒崗坝地古代徳昂族の巨大村落遺址、勐戛等地発現の大片古老茶樹林…^{④3}」とあり、茶に関しては伝統的に深いかわりをもっており、茶の産地でなくとも、民家の周囲や畑の畦畔には、自家用の茶を植えている。徳昂族も布朗族同様、伝統的な古い茶産地は、交通、運輸に便利な立地条件に恵まれた、新開発の茶産地に取って代り、古い茶産地には、古木の茶樹がその歴史を物語っている。

徳昂族の喫茶習俗は、常に濃い茶を好んで飲み、来客時には真先に茶が出されるが、日常生活には、噛み煙草と檳榔である。ことに老婦人には、噛み煙草と檳榔は、一時たりとも身体から離すことなく、好みの紋様から成る小袋（約横二〇センチ、縦約一五センチ）を肩から腰の辺に斜に掛けており、知人、隣人などに会うと先ず、袋から取り出して、お互いに交換し合って楽しんでいる。「嚼煙の原料是一種辛辣而有香味の植物、芦子、加上撒擠（用檳榔根、李子樹皮、栗樹葉熱成的黑褐色的朮狀混合物）和少量的熟石灰、烟絲。咀嚼一会、口中的唾液便变成紅色^{④4}。…」

徳昂族が飲む濃い茶は、こうした煙草、檳榔を噛む習慣の上に成り立つもので、それらに匹敵する香味が求められ、自然と茶も濃いものになったものと見られる。徳昂族と喫茶のかかわりは、喫茶習俗のみならず、婚姻儀礼にも現われており、結婚の儀礼には、茶の葉（製品）をバナナの葉に少量包んで、高さ十二～三センチ、直径三センチ程の竹編みの小籠に入れ、塩の小包みと共に男性側から女性側へ贈る。この儀礼の途中にも、噛み煙草の原料となる絲煙草は、常時手の届く所に置いてある。

この茶の葉と塩が、婚姻儀礼に使われるのは、ミャンマーのシャン族、パラウン族にも見られるもので、現在、徳昂族が崩竜族と呼ばれる頃からのもので、かつては、徳昂族とシャン族、パラウン族等が、相互に交流、接触のあったことを物語っているわけで、これら各民族の由来、歴史等をも物語っている。

雲南省南部のモン・クメール語族としての佧族も茶の濃いのを喜んで飲むが、「嚼檳榔是西盟佧族非常普遍的一種習慣。男女老少風乎每人都隨身攜帶檳榔袋或檳榔盒。勞働休息時和平常談話時，口中都含一快檳榔在咀嚼^④。…」とあり、同じモン・クメール語族のなかでも、佧族の民族的な閉塞性もあってか、漢族との交流も少なく、茶の導入も遅れているのではないかとと思われる。佧族の多く住む、雲南省西南のミャンマー国境地帯には、顕著な茶産地は見られず、伝統的な檳榔の習慣が根強く継承されている。

この傾向は、ミャンマー側に住む、ワー族にも共通しており、「首狩の行なわれる地方に於ては他地域との直接の通交が殆ど看取されず、僅かにシャインが仲買人として熟ワーの地方に来往し、又、支那人の回教徒が雲南の国境を越えて、毎年、食塩、米、織布等をワー族に齎し、阿片の荷を積んで帰るにすぎない^④。」かつて首狩族として恐れられていたワー族は、豊作と疫除け、健康を祈願したものであり、太った人やひげの濃い人が対照となっていた様である。もちろん現在は、キリスト教や仏教が普及し漢化も進み首狩りの習慣は、昔物語りとしても消えつつある。

(2)ミャンマーのモン・クメール諸族

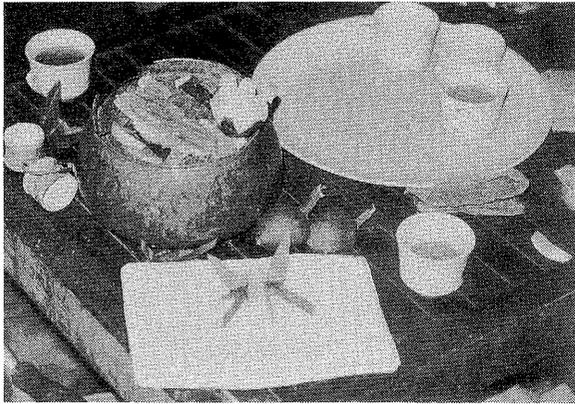
ミャンマーのパラウン族の茶

「モン・クメール語族は嘗て印度支那に極めて廣大な地域を占めていた語族である。然し乍ら近代に於て次第にタイ語族及びビルマ語族の爲め蠶食され、今日所々に小島嶼の如く散在してをる。西方に於ては、アッサムにカシ族ありマンダレイの北東にパラウン、サルウェン及びメコン河中流の周囲の山脈に Wa 及びその他 Khmu, Lemet, Rang 等の諸族あり、南。ビルマにモン族が残喘を保ってをる^④。」さらに中国領には、布朗族、徳昂族、佧族等が分布しており、これ等諸民の殆どが、茶及び檳榔と深いかわりをもっていることは、前述の通りである。

ミャンマーの北シャン州に住むパラウン族は、ミャンマーでの茶栽培、製茶の主要民族であり、シャン族やビルマ人への食べる茶の生産地となっている^④。ミャンマーのパラウン族の族源に関しては、それを適確に説明する資は見出せないが、その主要居住地の北シャン州は、雲南省の西南部徳宏傣族景頗族自治県の南部に地続きにあって、雲南省に於ける徳昂族（崩竜族）と同族となっている。したがって、雲南省の徳昂族が、かつては永昌を中心とする一帯に住んでいた「濮人」といわれている^④。ことから、ミャンマーのパラウン族も、永昌方面からの移住者とも考えられる。

パラウン族の茶史には、ビルマのバガン王朝四十五代の王様「アラウンシードウ王」が、一一一五年に雲南省西部に栄えた、「南詔王国」を訪ね、その帰りに茶の種子を持ち帰り、パラウン族に与え、茶造りを生業とすることを進めた^④といわれている。

ミャンマーは北シャン州のパラウン族の住む、ナムサン地方は標高も1,000~1,500メートルの高地で、しかも冬期間の乾燥があって、茶の木が自生する条件は備えて居らず、人の手によって導入、管理されないと充分な生育は出来ないわけで、地続きの雲南地方から導入されたものと考えられる。



第18図 檳榔が伝統的な嗜好品で茶は後から
伝わっている。ベトナムの習慣



第19図 ミヤンマーの北シャン州
ナムサン県に住むパラウ
ン族の製茶

ミヤンマーのパラウン族の製茶法に関しては、拙著^④を参照いただくことにして、パラウン族の茶と檳榔の関係を考えて見たい。

現在、パラウン族の住むナムサン県には、標高も高く、檳榔の生育は不可能であり、檳榔を噛む習慣は見られない。しかし、雲南省に住む同族の徳昂族には、現在でも檳榔は常に利用されておるわけで、これと同族のパラウン族であって見れば、当然考えられるわけで、しかも、絶えず山麓のシャン族との交流があったわけで、シャン族の生活習慣が受容されていたはずである。しかし、パラウン族もシャン族も、早くから仏教徒になっており、雲南省の傣族、タイ国のタイ族等に見られる様に、仏教徒の間には檳榔の習慣は、先ず見られないことから、ミヤンマーのパラウン族も、仏教化と共に消えたのではないかと考えられる。

モン・クメール語族としては、最西端と見られる、インドのアッサム州、現在の「メガラヤ」カシー丘に住む、「カシー族」には一九六八年の訪問時茶の栽培、加工はもちろんのこと、喫茶の習慣も無く、女性は専ら檳榔を噛んでおり、至る所に赤い唾液が吐き散らされている。一方男性は専ら酒であって、日没と共に酒の歌声が聞かれるわけで、茶とは全くと云える程無関係である。しかし現在は、メガラヤとして、アッサム州から独立し、かつてのアッサム州の州都であった「シロン」が、メガラヤの首都となっており、檳榔の習慣も変わっていることも考えられる。

さらに、東南アジア大陸部に散居する、モン・クメール語族の多くは、茶より檳榔の習慣が早くから定着しており^⑤、現在、この習慣が一部茶に代りつつあるわけで、その変容過程から味のもてる問題である。

(3)ベトナムの京族の茶と檳榔

ベトナムの京族(安南人)は、タイ族系諸族やモン・クメール語族の影響を受け、かつ中国とも深いかかわりをもって来たが、ベトナムの固有文化を維持して来た様である^⑤。

さらに、ベトナム北部産地は、茶樹の原産地と見られる、雲南省南部とも陸続きとなっており、茶とのかかわりも深いものがある様に思える。

一九九四年十二月、一九九五年十一月～十二月の二回の調査では、ベトナム北部山間地には、中国から「ザオ族」(瑶族)が移住しており、彼等が、茶の利用を始めており、自生茶と共にその周囲に茶の種子を播いて、茶畑としており、それ等が近年のベトナム政府の茶業開発と共に、茶産地が移動して、山地の茶畑は自然情態化しつつある。茶畑は放任されても、彼等の日常用の茶は、屋敷の周囲や畦畔に植えた茶をもって、自給している。

ベトナムの喫茶習俗は、取手の付いた筒状の酒杯大のものが茶碗であり、急須も筒状のもので、ベトナム製の釜いり緑茶を濃い茶として飲んでいる。お茶の濃さに於ては、日本人の口には到底あわない程の濃いものであり、食事後をはじめ、来客時はもちろんのこと、常時お茶は欠かせないものとなっている。

しかし、ベトナムの茶は伝統的なもので無く、ベトナムへ華僑の進出と共に伝来したものと見られる。ベトナムに見られる、現在の喫茶法は、中国でも広東省方面、それも、広東省東部の閩南地方のそれと、同様であって、この地方が華僑の出身地であり、喫茶習俗も同道されたと考えられる。

現在のベトナムには、山間地で瑶族を中心として、ムオン族に茶の生産が見られるが、フランスの植民地化に伴い、茶の産地がベトナム山地から丘陵地に移行しているわけで、ベトナム人、すなわち「安南人」(京族)には、茶より檳榔が固有の嗜好品として、継承されていたものである。前掲^⑥には「安南人は檳榔の實を噛む。檳榔樹の實を^{きんま}蒟醬の葉で包んで噛むものであるが、唾液はために眞赤となり、吐いた後をみると何物かを聯想して気色が悪いこと夥しい。」この報告は、昭和十八年のものであり、その後ベトナムは大きく変っているわけで、檳榔を噛む習慣も、都市部では殆ど見られず、都市近郊から農村地帯のみに見られ、しかも、老会な婦人のみに欠かせないものとなっている。

したがって、農村部には、民家の庭には必ずと云える程、檳榔樹を植えており、老人の嗜好品として、自給自足しており、市場にも檳榔の實を並べている人を見かけることが出来る。

ベトナムが、数千年にわたり、中国の影響を受けて来たわけだが、喫茶の習慣は受け入れることなく、華僑の伝来によって、始めて受容された様である。ベトナム北部、ハージャン省への国道わきの農家を訪問し、老婦人(七二才)に聞いたところでは、「お茶は子供の頃に伝って来た」との話であり、今では、来客時にはお茶を出す、私達は檳榔を噛む、ということであった。

ベトナム人(京族)には、茶よりはるかに古くから、檳榔が活きており、現在でも結婚式には、茶は無くとも檳榔は欠かせない。花嫁が眞先に行なうが、祖先に檳榔を供え、祝福に来た客のすべてに、檳榔が配られる。

もらった檳榔をその場で噛む人もあれば、持ち帰る人もあり、子供は親に渡しており、次に出る料理に目が集中している。

こうした習慣が、何時頃から始まっているか、さらに、何故檳榔が使われるか、についての細部の調査は今後の課題となるが、檳榔と茶の効用が似ており、茶の無かった頃の東南アジア大陸部に広く継承されていたものとする^⑧。

ベトナム人に古くから檳榔が使われていることは、「檳榔の實を蒟醬の葉で包み噛む事を嗜み、又齒を染めて男女ともその保健をはかっている^⑨。」わけで、檳榔の効用が古くから認められていた様である。ベトナム中部に栄えた「チャン人」には「…昔チャンパの王宮の傍に一本の檳榔樹があった。之がすばらしい苞で包まれた花を持っていた。人々は其の開花を持ったがどうしても開かないので王様は、その臣下に樹に登って苞の中を見さしめた。臣下は早速その苞をとって王様の前にもたらししたので、王様は之を二つに割ると中から小さいすばらしく美しい男児が出て来た。…以上の伝承はけっして後世の創作でなく、却て古い伝統から絲をひいて居る^⑩。…」

こうした、檳榔を日常生活をはじめ、人生儀礼などに広く使う習慣は、ベトナム、ラオス、カンボジャ、等東南アジア大陸部には、古くから伝承されており、茶以前のものと見ることが出来る。

まとめ

東南アジア大陸部から、中国南部雲南地方にかけては、檳榔樹の自生地であり、そこに住む各民族、タイ語族、モン・クメール語族、さらに、チベット・バーマ語族、苗・瑶語族等が、その果実を利用し、それを噛んでおり、現在でもその習慣は継承されている。

一方、茶樹の育つ中国の華中、華南、そして江南地方、さらに華北では、茶樹の葉が、漢文化として、仙薬思想などを基礎に発展していた。そうした漢文化と共に茶が南下し、さらに、仏教思想なども加わり、檳榔を噛む習慣が、喫茶の習慣に替えている。その檳榔から茶への変容の過程にあるのが、噛み茶であり、ミエンと呼ばれる茶である。

そして、その変容の役割の一部を果たしているのが、瑶族である。瑶族は、何処へ行っても茶を欠かせないが、完全に檳榔の風土となっている所、例えばベトナムなどでは、茶と共に檳榔も受容、同化している。

さらに、漢文化の影響の少ない、アッサムのメガラヤ、カシー丘に住むカシー族には、喫茶の習俗は見られず、専ら檳榔の習慣である。一方、西双版纳の傣族、広西壮族自治区の壮族、タイ国のタイ族、ミャンマーのシャン族等々の様に早くから、漢文化、仏教思想を受容している所には、檳榔の習俗は現在見ることは出来ない。

茶と檳榔のかかわりについては、各地の日常生活に活かされており、それが、漢文化や仏教とも深い関連があり、さらに、それぞれの民族性もあって、一概に結論は出せない。今後のより一層の調査により、さらに精査されるものと期待したい。

引用文献

1. 『瑶族の歴史と文化』竹村卓二 引文堂 昭和五十六年
2. 『清代社会経済史研究』重田徳 岩波書店 一九七五年
3. 広東省に於ける清・同治三年の瑶族の村広東通志卷三百三十 清・同治三年重刊本
4. 傣族社会歴史調査 西双版纳之一雲南民族出版社 一九八三年
5. 『中国名茶の旅』松下智 淡交社 一九八八年
6. 前掲④
7. 『雲南地名探源』雲南人民出版社 一九八六年
8. 『ベトナムの少数民族』菊池一雄 古今書院 一九八九年
9. 『Ethnic Minorities in VIETNAM DNG NGHIEM VAN CHII THAI SON LIHI HUNG HANOI. 1993年
10. 日本食糧新聞 一九九五年十二月八日
11. 北部ラオスの少数民族—特にヤオ族について— 岩田慶治 史林四三卷一号 京都大学文学部 史学研究室 一九六〇年
12. タイのお茶, 高屋茂雄(社)静岡県茶業会議所 一九八二年 一月号
13. タイの原始農業, 宮原義登 民族学研究 第二卷一号 財団法人民族学協会調査部 昭和十九年
14. 『東南アジア山地民族誌』白鳥芳郎編 講談社 昭和五十三年
15. ヤオ族の起源神話と種族的同定 竹村卓二 村上教授古稀記念論集 民族文化論 山川出版 昭和五十二年
16. 前掲⑮
17. インドシナ及びタイ国の食品覚書 浜田秀男 生活文化研究 昭和四〇年一月
18. 『壮族簡史』広西民族出版社 一九八〇年
19. 前掲⑱
20. 『壮族風俗志』中央民族学院出版社 一九八七年
21. 粵遊小志 江都張心恭 小方壺齋輿地攷鈔 第九帙
22. 南越筆記五十三 南清河王 小方壺齋輿地攷鈔 第九帙
23. 前掲㉑
24. 『広西通志』民俗志 広西人民出版社 一九九一年
25. 『傣族簡史』雲南人民出版社 一九八六年
26. 『傣族史』江応探 四川民族出版社 一九八三年
27. 前掲㉓
28. 『元江哈尼族彝族自治州志』中華書局出版一九九三年
29. 前掲⑨
30. 『印度支那民族誌』中島宗一 満鉄東亜経済調査部 昭和十八年
31. 『シャン民族誌』牧野巽訳 生活社 昭和十九年

32. 『印度支那の民族と文化』 松本信廣 岩波書店 昭和十八年
33. 『中国の少数民族』 村松一弥 毎日新聞社 昭和四十八年
34. 『蛮書』 校注(唐) 樊綽撰 向達校注中華書局出版 一九六二年
35. 『景東彝族自治州概況』 雲南民族出版社 一九九〇年
36. 徳宏史志資料一徳宏州史概況 徳宏州志編委会協会室編 一九八五年
37. 『景頗族簡史』 雲南人民出版社一九八三年
38. 前掲³⁶
39. ビルマの茶について 松下 智 熱帯農業研究 八巻一号 一九六六年
40. 布朗族社会歴史調査(2), 雲南人民出版社 一九八二年
41. 『布朗族簡史』 雲南人民出版社一九八四年
42. 茶と檳榔・その受容と変容一 嚙み茶をめぐる 松下 智 比較民俗研究第九号 一九九四年
43. 徳宏史志資料第四集 徳宏史志稿編委会協会室編 一九八五年
44. 前掲⁴³
45. 『佤族簡史』 雲南人民出版社 一九八五年
46. 『緬甸の自然と民族』 中島健一 養徳社 昭和十九年
47. 前掲⁴²
48. 『日本茶の伝来』一ティーロードを探る 松下 智 淡交社 昭和五十九年
49. 『徳昂族簡史』 雲南教育出版社 一九八六年
50. 前掲⁴⁸
51. 前掲³⁰
52. 前掲³⁰
53. 前掲⁴²
54. 前掲³²
55. 前掲³²

参考資料

- 『雲南少数民族生活志』 雲南民族出版社 一九九二年
- 『江城哈尼族彝族自治州志』 雲南人民出版社 一九八九年
- 『潞西県志』 雲南教育出版社 一九九三年
- 『雲南少数民族』 雲南人民出版社 一九八〇年
- 『雲南少数民族自治地方簡介』 雲南民族出版社 一九八五年
- 『中国少数民族風情録』 四川民族出版社 一九八七年
- 『民族食俗』 李東印四川民族出版社 一九九〇年
- 『東南アジア』 E・H・G ドビー著 小堀巖訳 古今書院 昭和三十六年
- 『タイ族』一その社会と文化 綾部恒雄 弘文堂 昭和四十六年

『ベトナム中国関係史』 一曲代の抬頭から清仏戦争まで 山本達郎編 山川出版社 一九七五年
『中華民族飲食風俗大観』 世界知識出版社 一九九二年

新刊紹介

劉 茂源編

『ヒト・モノ・コトバの人類学

— 国分直一博士米寿記念論文集 —』

本書は1996年4月28日にめでたく米寿を迎えられた国分先生への献呈論文集である。先生の学風を反映して寄稿者も考古学・民族学・民俗学・建築学・言語学・農学と広汎である。構成は序文(金関恕)、I部内なる世界—26編、II部外なる世界—24編、III部国分直一先生をめぐる世界(劉茂源)、最新国分直一先生行状記(樺島章史)、国分直一先生著作目録ならびに研究活動年譜(甲元真之・木下尚子)となっている。

50編の論文は広域にわたり系統だては編者を悩ませたらしく、その大枠が書名に示されている。ここでは民俗・民族学方面の、論文題目を紹介しておきたい。コロポックルの足跡(大林太良)、東南アジア・オセアニアのトビウオ漁(秋道智弥)、台湾高砂族言語とアイヌ語との関係(村山七郎)、『漂流台湾チョップラン嶋之記』覚書(三島格)、世界の平和と言語の保護(林景明)、雲南イ族の虎節と民間説話(伊藤清司)、中国閩西地区の“七姑子”土地神と“野人”(林蔚文)、客家の成立と畬族の関係(蔣炳剣)、韓国における葬祭儀礼の変容(竹田旦)、日本語方言に受容された朝鮮語(岡野信子)、“くだ”の力“つつ”の力(安溪遊地)、生業活動における歴史性と民俗性(吉田佳代)、サトイモの来た道(安溪貴子)、トカラは琉球かヤマトか(下野敏見)、奄美のユタの現代性(山下欣一)、地域に関する民俗(小野重朗)、下野の狩り(安田宗生)、異本阿蘇氏系図試論(村崎真智子)、小一郎神考(佐藤暁)、沓岐・対馬の舟競漕考(安

富俊雄)、森に宿る霊(湯川洋司)、尼寺にみる漁民の世界(伊藤彰)、伊豆諸島の海亀漁(橋口尚武)、ヌルヌル・ベトベト・アカ・シロ・クロ(平川敬治)、漁業神としての虚空藏菩薩(佐野賢治)、新版日本民族起源論(千葉徳爾)、東アジアにおける二つのナラ林帯(佐々木高明)、環礁のピット農耕(近森正)、貝製装身具の社会的変遷(新田栄治)、閩、台地域城隍廟建造の歴史的経緯(辛士成)、台湾民屋の形式と集落の構成(黄則修)、朝鮮の金属伝承(依田千百子)、グスク時代の小型鎌と穂摘み(安里進)、日本先史時代回転式鋸頭の系譜(山浦清)、女王国と邪馬台国(日高正清)、古墳時代の角力(山内紀嗣)、柄と風呂とセン(白木原和美)、

第III部は国分先生の人柄と学問が凝縮されて紹介されており、故金関丈夫博士の筆風を継いだ軽妙な樺島氏の行状記は続編がまたれる。近年、植民地下での学問論が検証されているが、台湾師範の100周年記念行事に招かれて講演し、全台湾の教え子と旧交を温めた新聞記事の内容と劉茂源氏の師に対する情あふれる一文を読むと軍国主義下での国分先生の気概が逆に伝わってくる。年譜を見ると生涯現役を地で行く活躍で、怠惰な自身が恥しく思われる。本文中の国分先生のポートレイトの他、写真の人々の顔が和やかで実によい。ヒューマニスト、国分先生の学風がそこからもうかがわれる。

(佐野賢治)

1996年6月刊行 B5判 662頁 慶友社